

2022年4月17日 イースター礼拝

説教題「希望の光」ルカによる福音書 24 章 1～12 節

主任牧師 加藤 誠

**「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい」(ルカ24章6節)**

イエス・キリストが十字架で処刑された時、弟子たちは自らのふがいなさに打ちのめされたことでしょう。「なぜ、自分は逃げてしまったのか。なぜ、踏みとどまられなかったのか」と。

一方で、主イエスへの問いも彼らの中に次々に沸き起こったことと思います。「この方こそ、神の子だ！」と信じてきたのに、主イエスは何も奇跡を起こすことなく、何も抵抗することなく、あっさりとして処刑されてしまった。かつて主イエスが「神の国は見える形では来ない。ここにある、あそこにあると言えるものでもない。実に、神に国はあなたがたの間にあるのだ」(ルカ 17 : 20) と宣言された時、「ほんとうにそうだ!」、「確かに神の国(神の愛の支配)は私たちの間に実現しているのだ!」と確信し、心は炎のように燃え上がったのに。「イエス様、あなたの言葉は虚しい幻想だったのですか?」。その虚しい幻想のために自分はすべてを捨てて従ってきたとは。主イエスにすべてをかけて従ってきたからこそ、弟子たちは心に沸き起こる深い失望を抑えることができなかつたのではないかと思うのです。

そしてまた、神さまへの疑問と憤りもふつふつと沸き起こったことでしょう。「神の子として愛と真実に生きられた主イエスを、神さま、あなたはなぜ救ってくださらなかったのですか?」。あれだけの悲劇が起こったのに、世界は何も変わらず、何の天変地異が起こることなく、いつものように陽が沈んで、次の朝には太陽の日が昇る。「神さま、あなたはこんな不正義がまかり通る世界を、何もせずに放置されるのですか? あなたはいったいどこにおられるのですか?」と。

そして最初のイースターの朝も、いつものように陽が昇り、いつものように一日が始まったのでした。ローマ帝国がイスラエルに君臨し、宗教家たちは支配階級に都合の良い教えを説き、貧しい民は重税に苦しみ続けている。前日から一ミリたりとも変わらない不条理と不正義に覆われた世界。「神の子」主イエスが説いた「神の国(神の愛の支配)」は虚しく消え去り、すべては水泡に帰した。その虚しさと絶望の中で彼らは一歩たりとも動けなくなっていたのではないのでしょうか。

けれども、主イエスの墓をふさいでいた大きな石が不思議にも転がされていて、主イエスの遺体に香油を塗るために墓にやって来た女性たちの働きは不要となつたのでした。そして、失意と虚しさに満ちてエルサレムからエマオの村に向かって歩いていた二人の弟子は、喜びあふれてエルサレムに戻っていったのです。

主イエスが生き生きと教えてくださった「神の国(神の愛の支配)」は虚しく消えてしまったのではない。主イエスは死を打ち破り、墓の石を動かしたもう! 主イエスの愛と平和の働きは、今も私たちの間に生きている!

それは世界の中ではほんの小さなからし種のような変化ではあったけれど、イースターの「希望の光」を受けた人びとの歩む方向は百八十度ひっくりかえされて、「神の国（神の愛の支配）」に向かう歩みに変えられていったのでした。

先週の受難週の一週間、朝と夕に礼拝堂を祈りのために開放しましたがけれども、その初日の10日の朝、礼拝堂のステンドグラスから射し込む朝のやわらかな陽ざしにステンドグラスの色がきれいに礼拝堂の白い壁に映し出されて、息をのみました。それを見ながら、主イエスは暗闇に閉ざされた私たちに神さまの希望の光を照らす「窓」になってくださったのだと示されました。今日も世界を覆う暗闇は変わりません。二千年前から、そのずっと前から人間たちが抱える闇は変わりません。人間の闇は毎日大きな悲慘と苦難を生み出しては、特に小さくされている人たち、立場の弱い人たちの命を深く傷つけ続けています。世界にあふれる人間の罪は何も変わらない。けれどもその世界の中に神に向かう「窓」が開けられた。暗闇に閉ざされた世界に神の国の「希望の光」を届ける「窓」に、主イエスはなってくださった。世界の暗闇は何も変わらないようだけれど、インマヌエルの主、イエス・キリストによって、この暗闇の世界と神の国とをつなげる「窓」が確かに開けられたのです。この「窓」によって世界は確かに変えられた。主イエスが「窓」になってくださった以上、私たちが照らす「希望の光」が消えてなくなることはないのです。

「神の国は、小さなからし種のようなものである」。世界の中では小さな小さなからし種であっても、やがて大きく枝を張り、空の鳥を宿すほどに成長していく。たかがからし種、されどからし種。この世界がどんなに暗闇に覆われても、イエス・キリストという「窓」から射し込む光が、人びとの心を、人びとの顔を「希望の光」で照らし続け、神の国の働きを広げていくのです。

男の弟子たちは、イースターの朝、墓に出かけた女の弟子たちの報告を「たわごと」のように思って信じようとしませんでした。彼ら自身の中から信仰は失われてしまっていました。しかし、主イエスはその不信の弟子たちに自分の方から近づき、復活の「希望の光」がこの世界を確かに照らしていることを示されます。ヨハネ福音書で主イエスが暗い部屋の中に閉じこもっている弟子たちに最初に語りかけた言葉は「平和（シャローム）」という言葉でした。新共同訳では「あなたがたに平和があるように」と訳されていますが、原文では「平和」という単語一言です。ヘブライ語で「シャローム」。ふつうは挨拶の言葉ですが、この復活の場面では挨拶以上の意味が込められています。つまり「平和！」「平和はここに、わたしと共にある！」という主イエスの宣言です。怯え、不安と疑いの中に沈んで、扉という扉をすべて閉め切っていた弟子たちの間に、「平和であるわたしが生きている。大丈夫。この平和を受け取り、ここから出かけていきなさい！」という呼びかけです。この復活の主イエスの「平和（シャローム）」の宣言と共にイースターの「希望の光」が輝いています。私たちもこの「希望の光」に照らされて歩いていきましょう。